

荒井寛方の画業について一寛方筆《暮れゆく秋》を中心に

三上美和（京都芸術大学）

荒井寛方（1878－1945）は明治後期から昭和戦前期にかけ、仏画をテーマに格調高い作品を描いた日本画家である。

寛方は一般にはあまり知られていない。しかし、浮世絵の流れをくむ大家水野年方に師事し、歴史風俗画家として画業をスタートさせ、日本美術院の再興に参加した以降はその同人として院展で活躍した。また、晩年には法隆寺金堂壁画模写事業にも携わっており、戦前の文化財保護活動とも密接に関係しながら、日本近代の仏画の発展に重要な役割を果たした。

年譜や作品目録の作成といった寛方に関する基礎研究は行われてきたものの、個々の作品の詳細な検討はほとんどなされてこなかった。寛方の画業の解明により、同時代の文展や院展の画題や作風の傾向をはじめとした近代日本画の重要な一側面を明らかにすることが期待される。

筆者はこれまで、明治から昭和初期に活躍した横浜の実業家であり、古美術の大コレクターとして、そして芸術のパトロンとしても著名な原三溪（1868－1939）を研究課題としてきた。三溪を研究する過程で、寛方が修業時代に三溪から支援を提示され、以降生涯を通じて三溪と深く交流していたことを知り、この認識を契機に現在調査を進めている。

本発表では前期の代表作であり、寛方の作品の中でも異彩を放つ風景画《暮れゆく秋》（大正3年・1914、さくら市ミュージアム - 荒井寛方記念館 - 蔵）を取り上げる。

《暮れゆく秋》は、寛方が紀州の熊野神社参詣の際に行ったスケッチに基づく風景画である。画面向かって右に大きく神社の社が、その左に大木が配され、風に揺れる木々と木の葉の舞い散る様子により、秋の情景が繊細に描き出されている。本作品は再興第1回院展に出品され高い評価を受けたとされているが、翌年の再興第2回院展に出品された《乳糜供養》（東京国立博物館蔵）に比べ注目されているとは言い難い。確かに、仏教説話の一場面を絵画化した《乳糜供養》の高い評価により、寛方が日本美術院同人に推挙され、さらにその結果インドへと渡る契機となったことから、《乳糜供養》が寛方の生涯にとって一里塚となる作品であることは間違いない。

しかし、発表者は、寛方がその前年に《暮れゆく秋》で風景画に挑戦したことによって、自らの描くべき主題を真摯に問い直すきっかけとなったのではないかという仮説を立てた。そして発表者は、その仮説に基づいて、《暮れゆく秋》を寛方のその後の画業を方向付けた作品として改めて位置付けたい。

本発表では《暮れゆく秋》における寛方の風景画への挑戦に着目し、その制作背景について、当時の文展の傾向や、特に寛方とほぼ同時代、日本画を革新したとされる今村紫紅（1880－1915）の影響、寛方の人生の節目となる出来事などの検討により、本作品が寛方の画業にとって従来見過ごされてきた重要な作品であることを指摘し、今後の寛方研究の一助となることを目指したい。